

深田研究助成創世記

佐藤 正

これは2014年9月5日の深田研60周年記念事業のときの講演原稿です。実際はこの通りには話しませんでした。脱線して時間が足りなくなり、はしょってしまったところもあります。余計なことを挟んだところもあります。深田研ニュース用に再録するにあたってほんの少々手をいれましたが、大部分はもとのままです。

佐藤です。25分もらいましたので、深田研究助成を始めたころの話をいたします。まだ86歳ですので、やり残したことを片付けられるだろうと思っています。しかし、若いつもりでも、やはり頭も口も回らなくなっていますので、話があちこちとんだり、繰り返したり、あるいは口を滑らせて余計なことをいったりするかもしれません。その時にご勘弁ください。お話ししようと思ったことは、だいたいお手許に配られている小冊子に書いておきましたので、こんがらがったらそちらがほんもの話だと思ってください。

深田研の始め

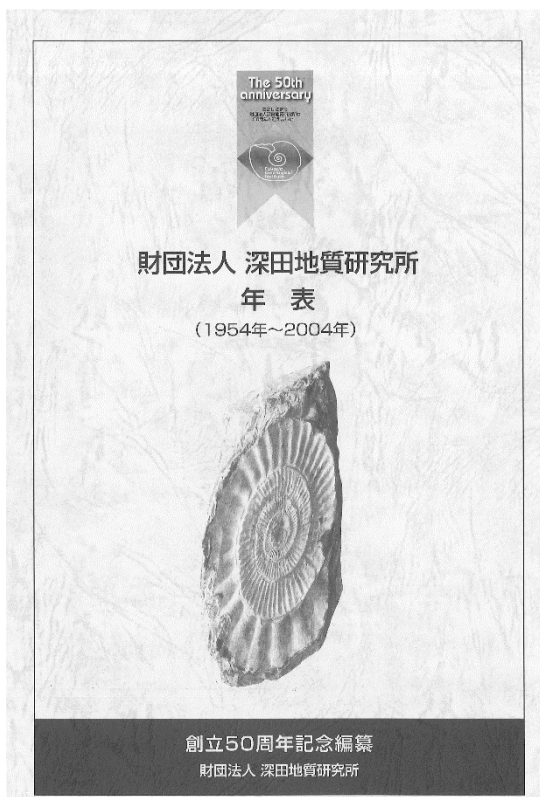
深田研はご承知のとおり、60年前、昭和29年、1954年の5月に創立され、今年で60年になります。その間いろいろなこ

とがありました。深田さんが北大を辞めて東京に戻られ、日本で初めての民間の地質の研究所をつくるということは、当時まだ学部を卒業したばかりの私も噂に聞いて知っていました。しかしそれは遠い人ごとのように思われました。深田さんは私の大学の講座の先輩で、お名前はもちろん知っていましたが、始められた研究所のことにはほとんど関心がありませんでしたし、その後もずっとそうだったのですが、どういう風の吹き回しか深田研に関係ができました。そのきっかけがこの深田研究助成金でした。平成8年、1996年に理事長をやるようになって、本格的に深田研に関係するようになり、10年くらいまじめに勤めました。理事長を辞めても、まだここに出入りしています。

深田研 50 周年記念

深田研が財団法人として認可されたのは同じ平成29年の10月だったそうです。たしかその時の認可状が残っていて、会議室に掲げてあると思います。平成16年には50周年となりその記念の会をやる時、なくなった武内さんが深田研の年表をつくっています。これです。これを見るとその後の活動のだいたいがわかります。これか

からお話する出来事の日付はこの年表によっ
ています。



創立 50 周年記念に編纂された「財団法人深田
地質研究所 年表」

営利部門の分離

財団法人として認可されたとはいえ、財
源を確保しなくてはならないので、深田さ
んや陶山さんは地質調査の仕事をやって資
金を稼がざるをえませんでした。しかし、
財団法人が金儲けばかりやるわけにはゆき
ませんから、営利部門を法人から切り離し
て、応用地質調査事務所という会社を3年
後につくり一応別会社にしました。これは
その後発展をつづけて、応用地質と名を変
えて現在にいたっています。こっちの方が
大きくなって、もとの深田研は小さく目立

たなくなり、一時は名前だけという状態に
なっていました。歴史的には深田研が
親で応用地質は子供です。私はこういう神
代の時代のことをほとんど知りませんが、
平成の初め頃、1980年代の終わりころま
で深田研と応用地質の区別はあまりはつき
りしていなかったのだらうと思います。事
実1975年から1992年の間は深田さんが応
用地質の会長と同時に深田研の理事長をや
るといった状態でした。世の中では深田研
というのは応用地質の1部門だと理解され
ていたようです。今でもそうかもしれませ
ん。私も深田研に来てから、深田さんが深
田研の会議で応用地質の経営状態を説明さ
れるのを多少奇異の感じを持ちながら聞い
ていました。

文部省の指導

これが当時の監督官庁だった文部省のご
機嫌をたいそう損ねました。平成の始めこ
ろになると、深田研に文部省が強く働きか
けてきて、両者をしっかり区別するよう
という指導か命令かができるようになりまし
た。深田さんはご自分でつくった深田地質
研究所が潰されやしないかと強く憂慮され
たのでしょう。いろんな手を打たれまし
た。平成4年、1992年に理事長の職を応
用地質色の強くない故増田秀夫さんにゆず
り、ご自身は理事にとどまるという形をと
りました。また 一時文部省OBの芳賀さん
という方を理事に呼んできて、文部省との
交渉にあたってもらったこともありまし

た。私も深田さんが新年の挨拶に文部省にゆくのについていったことがあります。文部省というのは偉いところだなあと思いました。しかし、相手は監督官庁ですから、財団法人としてやっている事業を報告しなければならず、深田さんはこの頃にいろいろな財団法人としての事業を考え始められたようです。このあたりの事情は今日ご参会の皆さんの中には私よりずっと詳しい方がおられると思います。私の理解は完全に二次的な情報によっていますので、まちがっているかもしれません。

深田研の事業

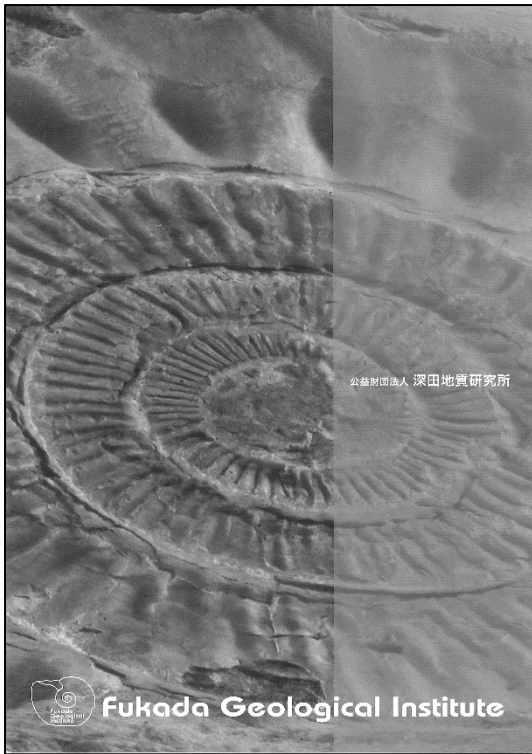
研究所と名乗るのですから、第一の事業は研究です。その結果を研究所報告という形で出し始めたのが平成6年1994年3月からです。深田地質研究所報告というのが1号から18号まででていますが、これは18号で立ち消えてしまい、現在は出ていません。さらに、世間に深田研はこういう事業をしているよということを広報しなければなりません。そこで考えられたのが、この深田研究助成、談話会、深田研年報の出版といった非営利事業でした。深田研究助成はそのなかでも世の中にアピールするのにいい事業だということで計画されたと思います。今では深田研の事業は4本柱になっていて、パンフレットにあるように1研究事業、2育成事業、3普及事業、ならびに4助成・顕彰事業です。1は説明の必要はありません。2育成事業はジオフォ

ーラムとか現場実習などです。3の普及事業は談話会などです。4助成・顕彰事業がこの研究助成などです。このきれいなパンフレットに要領よくまとめてありますので、興味のある方はごらんください。深田研の財源は応用地質の株の配当が主です。深田研は応用地質の筆頭大株主です。一般からの寄付は募っていますが、政府からの交付金などはもらっていません。深田研は金持ちだと思われているようですが、内実は財政困難です。私のいたころはいつも赤字でした。

研究助成事業

助成事業に話を集中します。実は私はこの企画のころはまだ深田研と関係がありませんでした。ですからこの企画が生まれた当時の経過はほとんど知りません。私が助成事業に関わるようになったのはもう計画の骨組みがだいたい出来上がった後です。深田研究助成の財源は深田さんが資金を寄付されたものです。現在も用途を明記した予算がとられています。名称は深田さんがお父さんの錠造さんを記念して深田研究助成ということに決められました。ですからこの助成金は深田研・研究助成ではなく、深田・研究助成なのです。年間500万円という予算はこの深田さんの寄付で決まりました。このパンフレットには助成・顕彰事業のページに深田研究助成 FGI Grant-in-Aid と書いてありますが、これは間違いです。FGI というのは Fukada Geological

Institute の略ですから、本当は Fukada Grant-in-Aid でなければなりません。



深田研のパンフレット

選考委員会

平成5年1993年の1月19日に私が当時勤めていた兵庫教育大学という大学の事務局経由で深田さんから電話がかかってきて、会いたいというお話がありました。これが私が深田研と関係するようになったきっかけでした。そこで同じ月の22日に東京でお会いすることにしました。たしかパレスホテルで深田さんだけでなく、増田さん、藤江さん、高木さんも一緒でした。お会いしたら、研究助成を始めるので、選考委員をやってくれというお話でした。私はぐずぐずするのが嫌で、即座にお引き受け

してしまいました。選考委員会をつくるについて、ほかの選考委員も推薦してくれというので、あとお二人、名前は出しませんが、推薦しました。どういう方を選ぶか、とっさに地質学の領域全体を3人で見渡せるように、またある大学に偏らないように、と考えたのを覚えています。私は当時構造地質をやっていたので、あと岩石学や古生物学に明るい人と考えたと思います。推薦したお二人は幸い非常に好意的で、すぐさま応諾の返事をくださり、同年2月の半ばまでには選考委員会ができてしまいました。委嘱状は藤江さんが先生方のところに直接もって行って手渡しました。ずいぶん丁寧だったと思います。この選考委員会は私が平成8年、1996年に理事長に就任して選考委員をやめた時まで続けました。選考委員は深田研とは独立の組織にしたかったので、深田研の職員は入れないことにしたのです。理事長が入るのはまずいのです。

私に選考委員がまわってきた理由

どうしてそれまで深田研と全く関係のなかった私のところにこの話が来たのか、実はよく分かりません。深田さんとは講座の先輩だというだけで、個人的には一度北大でお会いした（というより押し掛けた）ことがあるだけでした。深田さんはこのへんのことを私に話されたことはないし、書き物にして残しておられないので、以下は私の推察です。私は1992年に京都で万国地

質学会議 IGC という国際会議の組織委員長・会長をしました。そのとき会議のための寄付を経団連を始めとしていろんなところに頼みに回ったのですが、全地連はそのなかに入っていたのはもちろんです。当時深田さんは全地連の会長だったと思います。それが深田さんが私を知ってくださった理由だろうと思います。もう一つは例の文部省との関係で、応用地質から選考委員を選ぶことは論外だったのだそうです。こうして私にお鉢が回ってきました。

選考のやり方

選考は深田研とは関係のない人で構成する選考委員会でやることも決まっています、これも文部省との関係です。選考の結果はこの選考委員会の決定をそのまま受け入れて、深田研から注文をつけることはありません。このやり方は今でも引継がれています。これは大声でいっておかなければなりません。選考のやり方や選考の基準はこの選考委員会で議論して決め、それはそのまま受け入れてもらいました。選考のしかたですが、科研費の選考のしかたを原則そのまま適用しました。特定のテーマを選ぶのではなく、応募の中から客観的にすぐれた研究を選び、なるべく大学や研究分野にかたよりにないように配分するというようなことにしました。土木地質的な研究が重視されるといったことはありません。たしか委員が各申請に点数をつけて集計し、分野が違って評価の難しいものはよく分かる委

員の説明を聞いて、議論をして決める、といったどこでもやっている研究費配分のやり方だったと思います。

最初の募集

最初の募集要項は私が委員を引き受ける前に、国内 33 大学の地質関係の教授方に配られていました。この第 1 回の配布先の選定にも私は加わっていません。国内の理学部（ないしそれに相応する学部）地質学教室のほとんど全部に、教室宛でなく、その教室の教授個人宛になっていました。どうして個人宛にしたのか、これも私にはよく分かりません。締め切りは 2 月の後半で、応募は 19 件ありました。重視する研究は、大学や研究所の若手がやるもの、なるべく野外調査に力点をおいた研究であることなどにしていました。各大学からはそれぞれ 1 件ずつ推薦してくれと要望したのですが、複数応募してきたところもありました。しかし複数だからだめだと機械的に拒絶するのではなく、内容にしたがって採択するという方法をとりました。できるだけ官僚的でないようにしようという意図があったことはいまでもありません。

第 1 回選考委員会

私に選考委員になれという話が来たのが平成 5 年の 1 月、選考委員会ができたのが、同 2 月、募集締め切りが 2 月 20 日、選考委員会が 4 月 5 日という早さです。その日のうちに採択を決めてすぐその方々に

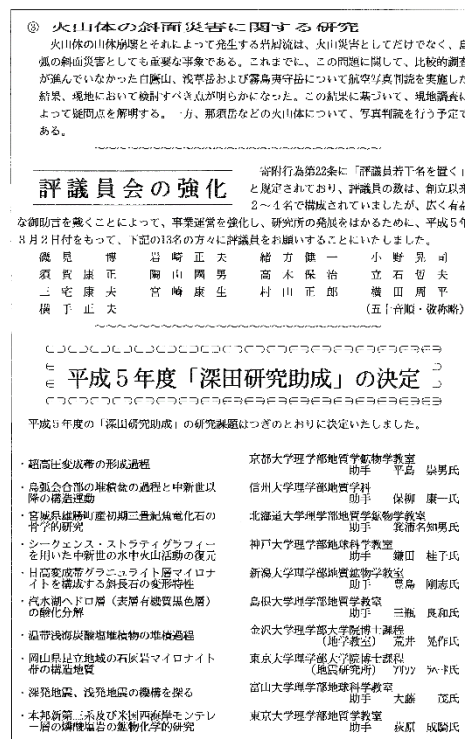
通知連絡して、4月中には使えるようにしたのですから、民間の組織ならではのスピーディーな運用でした。

第1回の選考委員会は深田研には当時会議するような会議室がありませんでしたし、応用地質の部屋を借りることも論外でしたので、都内で探した結果、経団連会館の会議室を借りることになりました。この会議にも深田さんはじめ増田さん、藤江さん、高木さんが見えて、なかでも藤江さんは会議が終わるまで会議室の外で待っておられて、恐縮したものでした。ここで選考の方針、やり方、配分費用、採択者の決定など細かい審議をしたはずなのですが、私の記憶はぼんやりしていて細かいところがどうしても思い出せません。

第1回の選考結果

結果はお配りした小冊子にあるとおり、10件選ばれました。募集要項を配ったところが地質関係ばかりでしたから、採択されたのも純粋理学的なものばかりで、応用色のあるものは入っていません。東北大の箕浦さんのように魚竜化石の骨学的研究なんていう浮き世ばなれしたものも入っています。採択率は19件中10件ですからほぼ2分の1です。10件に500万円ですから1件あたり平均50万円で、多いとはいえませんが、文部省の科研費がいろいろな制約があって使いづらいので、そういう制約をなるべくつけないようにしました。特に旅費はかなり自由にお使いくださいというよ

うにしました。また決めたらすぐ通知を差し上げて、なるべくすぐ使えるように手配しました。科研費のように手続きが煩雑で決まるのが年度の半ばになるという馬鹿げたことを避けたいとみんなが思ったからです。せっかく民間の助成金なのですから、できるだけ官僚的なことはやめようという考えからでした。実はこの後、財政難で助成金の総額を400万円にしたことが1回あります。このことは深田さんの逆鱗にふれて、次回からもとの500万円に戻りました。



選考結果は、深田地質研究所ニュースに掲載された(第4号, 1993年4月発行)。

採択された方々のその後

この採択者リストを見ると、最初の助成金を差し上げた方々が、今では日本の地質

学界を背負ってたつ、そうそうたる顔ぶれであることに驚かされます。現在の大学の教授級の方々の名前が並んでいます。巨額の研究費ではありませんが、多少なりともお役にたっているという満足感を持ちます。これは誇ってもいいことのように思います。これからあと現在まで21回配分をしていますが、私の知らない方で、配分を受けた方から時々深田助成金をいただきましたというお礼を言われて驚いたり、誇らしく思ったりしています。私がお金をだしたわけではありませんのに、この助成金が世の中にいささかなりとも貢献していると思うのは自己満足にすぎないともいえません。

これまでの実績

これまでにこの深田研究助成に応募された件数は575件、採択されたのは246件で、倍率は高いときで3.3倍、低い時でも1.4倍あって、平均すると約2.3倍です。これを高いとみるか低いとみるかは簡単にはいえませんが、最近は何かがあちこちから出るようになってきているのに、こういった倍率を維持しているのは、評価されているとあっていいのかもしれませんが、また、次第にこの深田研究助成金があることが知れわたるようになってきて、最初のころのように理学部系統の純粋理学領域からだけでなく、だんだん応用方面からの応募も増えてきて、最近は何かが工学関係の方々の応募もかなり多くなりました。選考委員はかなり

長いこと理学部の地質学関係の方ばかりでしたが、応募される分野が広がるにつれて対応できなくなり、今では工学関係の先生方にも加わっていただいています。年度の終わりまでに、前年度の助成研究の成果をまとめて研究助成報告書として出版しています。これは第1回から第22回まできちんと出しています。



これまでに発行した「深田研究助成」研究報告

世間の評価

私は研究費を出す方の人間ですので、客観的な評価をする立場にありません。出す方の人に面と向かって悪口を言う人は少ないでしょうから、どういうお考えの人がいるかはわかりません。良い評価はもちろんあちこちから聞こえて来ます。とくに若い人々がたった50万円とはいいいながら、自分で思うように使える研究費をもつというのは嬉しいものです。私などは助教授になってからでも、研究費がなくて困っていました。お情けで教授先生にいくらもらっても嬉しくはないですね。もっとも聞こえてくる評判は良いことばかりでもありま

せん。世の中いつでもそうですが、あまり内実を知らずに思い込んだり意図的に誤解したりして、悪い方にとられる方もないわけではありません。しかし、そういう世間様の評価を気にしてもしかたがありませんので、おめでたくいい方にとることになっています。

おわりに

というわけで、深田研究助成金は独立した深田研の事業の一つの柱として十分存在価値をもっているものと思います。研究所創立 60 周年の記念として、助成金の始めのころの事情をお話いたしました。今後ともこの事業が継続してゆくことを願っています。

(公益財団法人深田地質研究所／会長)